

# 環境・福祉・教育

別府大学文学部 人間関係学科

秋田 清

## I) はじめに

大学での教育をやっておりますと、時折、高校、中学、小学校や幼稚園の先生方との話し合いの必要性を感じることがあります。これまでも、私が所属しております別府大学地域社会研究センターでは、不登校やいじめ、子育てについて、先生方や親御さんたちとシンポジウムなどやってまいりました。今回こういう形で、問題提起の機会を与えていただきまして、関係者の皆様に感謝しております。

早速、本題にはいらさせていただきます。

今回は、「学校教育における社会奉仕体験活動を考える」というのが、与えられたテーマであります。ご依頼を受けて、その趣旨は、われわれが日頃考えておりますことと似ておりまして、ぜひ、お話をさせていただきたいと思いました。

しかし、最初から、多少の違和感がありました。それは、「ボランティア」と「社会奉仕」という言葉をほとんど区別しないで使っておられました。それは同じものなのだろうかということです。それに、文部科学省関連のホームページをみますと、この問題に関する審議会の答申などなかなか良くできていると思いました。しかし、これは、政府や自治体など、行政の側から言うことなのかという思いもしました。

もちろん、マイナス評価だけをしているわけではありません。たとえば、最近の学生と話をしても、障害者福祉や差別に対する批判的な感覚は、小学校以来の学校教育に負うところ大だ

と思います。それは大いに評価されるべきだと思います。しかし、だからこそ、その底の浅さ、一面的な知識でしかないことを残念に思います。言葉を飾らずに言えば、教育の偉大さと同時に恐ろしさを感じます。彼らの思いや考えは、繰り返し教えこまれるがゆえに、そう思いこんでいるだけではないかという気がします。

例えば、学生に「いじめや差別はなくなりません」と言ったり、「身体的、精神的障害者を見て気味悪いと思ったりしたことはないか」と尋ねると、多くの学生が「先生がそんなひどいことを言う人だとは思わなかった。先生を軽蔑します」と言います。そこで、学生に「初対面の人と握手をしようとして相手の人の手を見たら、人差し指が半分しかなかった時、君達はまったくたじろぐことがないか」と訊きますと、ほとんどの学生は言葉に詰まります。骨の曲がった魚を見てなんとも思わないかと訊くと、「気味悪い」と言います。

優等生的な正解は、常識破りにほとんど無力です。「なぜ？」とか「どうして？」という間に、返す言葉を知りません。美しいものを美しいと感じ、醜いものを醜いと感じるのは正常な感覚です。問題は、何を美しいと感じ、醜いと感じるかという感覚を鍛えることです。残念ながら、学校教育はそうした感覚を育てることを抜きに、浮ついた「正解」を教えているに過ぎません。それは、現状を維持することに汲々としているからです。それは教育の墮落です。ひょっとしたら、教育そのものの限界かもしれません。

あえて言えば、「ボランティア」を「社会奉仕」に読み替えようとするのは、新しい動きを古い体制に取り込もうとする足掻きに見えます。

極論かもしれませんが、問題を明確にするためには、役に立つと思います。この点を敷衍することから、話を始めます。

1) 本稿は、大分県教育委員会の初任者研修での講演依頼を受けて準備した、第1次草稿である。実際の講演は大幅に修正したものになっている。

## II ボランティアとは

辞書を見ますとたしかに‘volunteer’には、「社会奉仕」という訳語も当てられておりますが、「ボランティア」の核心はあくまでも自発性にあります。しかも、「社会奉仕」という言葉には「全体のために尽くす」という意味が含まれております。その時、その「全体」の在り様は問われてはおりません。それは前提になっています。しかし、近年の「ボランティア」運動は、その全体の在り様にたいして疑義をはさむものです。少なくとも、当てにならないものとして、それを無視する。場合によっては、それを見捨てるという意思を含んでおります。

すこし具体的に言うと、行政（国や地方自治体）の穴を埋めるだけに終わるかどうかが、新しい地域社会を形成できるかどうか、ここでは問題になっております。

### ・ 社会奉仕 ⇔ ボランティア

明日、皆さんがたが参加されようとしているのは、ボランティアなどではありません。「初任者研修」でボランティアなどは、言葉の矛盾です。よく言われるように、学校で集団で行われる児童、生徒の「ボランティア活動」と同じように「自発的にやることを強制されている」に過ぎません。それだけ単独に捉えれば、「社会奉仕」でさえありません。単なる「体験活動」です。だから3日間の研修で、「社会奉仕」や「ボランティア」について考えるように計画されております。それを生かして欲しいと思います。

もちろん「体験学習」はそれ自体意味があります。最近、教師が銀行やデパートで接客業務に携るという形で、「体験学習」をしています。こうした形での社会参加は、学校という閉鎖社会の中で、独善的になる傾向を避けるという意味でも、言葉だけの教育を避けるという意味でも重要なことです。

明日、実際に参加されたら、それはそれできついかいけれども、楽しい仕事であることに気付かれると思います。そこを職場にしておられる人々の「技術と誇り」に気付かれると思います。それに気付く感覚を呼び起こすことがとても大事なこと

のように私は思います。

ここで、「ボランティア」についてすこし整理しておきたいと思ひます。

さきほども申しあげましたように、ボランティアという概念の核心は自発性にあります。あるいは主体性にあります。それは「強制」や「金勘定」と対立しています。

### ・ 強制 ⇔ ボランティア

封建社会に、「賦役」というのがありました。同じ労力の提供だから、あれもボランティアかと言うと、そんなことはありません。あれは租税、強制です。ご存知のように、封建社会は身分制によって社会が成り立っております。身分制に基づく、強制と被強制の関係が、人間関係の基礎を成しております。村落共同体の内部においても「村八分」という脅迫が背後にあって、共同性が維持されております。

### ・ 金勘定 ⇔ ボランティア

身分制に基礎を置く社会は、商品経済の展開と共に崩壊し、近代市民社会が成立します。商品交換と代議制による政治的支配が社会の基礎を成しています。自由、平等、友愛を旗印としたこの社会においてはじめて、「個人」「人格」が成立します。

しかし、この社会は、利己的人間を前提にした、金勘定の世界でもあります。個人の労働によって得たものは自分のものです（労働全収権）。他人のものが欲しければ、自分の労働によって得たものと交換することによって手にいれます。社会的に必要なことは損得勘定に支えられて満たされず。需給関係と価格の騰落によって、生産と消費が調整されて行きます。

経営者がどんな意図で生産をするかとは無関係です。自分は電化製品を作ることによって、人々の生活を豊かにするのだと考えていても、儲けなければやって行けません。どんな善意も金勘定抜きには、長続きはしません。

環境だ、福祉だと言っても、これはいわば、経済の高度成長とバブルの落し子です。高成長で金を儲け、これまでの分野では利潤の上がる投資先が見つからず、新たな投資先として、環境や福祉

が選ばれているだけです。それは、介護保険成立後の福祉事業の乱脈振りを見てもわかります。

人々の福祉意識の高揚が、福祉政策や行政を作り出しているわけではありません。福祉事業を新たな投資先として利用するために、福祉意識を高めていると言うのが実相です。それは、財政難になれば、真っ先にそれが切り捨てられることを見ても明らかです。

じゃ、「福祉」や「環境」はマヤカシかと言うと、たしかにそう言う側面はありますが、それでも、環境や福祉に関する国民の意識の高揚は良いことです。そのようなマヤカシを含みながら、より良い生活は実現されて行くと考えべきです。

日本におけるボランティア活動は阪神・淡路大震災の被災者に対する援助活動で始まりました。そこに参加した人々、とりわけ若者たちの活動は目を見張るものがありました。彼らの活動は、奉仕活動かもしれませんが、彼らはそれを楽しんでいる、あえて言えば、「遊び」です。おもしろいから、楽しいからやっているのです。これがすごいと思いました。この年を日本におけるボランティア元年と呼んだ人がありましたが、これは人間関係における新しい時代の幕開け、ポスト近代の幕開けだと私は思います。

これも皮肉なことに、高成長やバブルの落とし子です。豊かになったがゆえに、損得勘定ではなく、楽しみで活動できるようになったともいうことができるからです。

ところが、時期を同じくして、日本の社会はバブルがはじけ、一生懸命働けば報いられる時代は過ぎました。高成長の終わりの頃は、経済の成長は物質的豊かさは保証してくれたが、精神的豊かさは作り出してはくれなかったなどと呑気なことを言っておりましたが、今や老後の保障さえありません。高成長を支えてきた、いわゆる「日本的経営の終焉」です。

#### ・ ボランティア ⇒ ネットワーク社会

高成長・バブルの崩壊・日本的経営の終焉は、同時に、人々を金勘定の世界から、少なくとも精神的には解放しました。もはや、一生懸命働けば、会社に忠誠を尽くしておれば出世もし、給料も増える、少なくとも一生安楽に暮らせるなどということは保証されていません。何時会社が倒産する

かもしれないし、クビになるかもしれません。大企業に勤めて金持ちになること、出世をすること、それらは裏切られることを通して、人々の夢ではなくなりました。大量のフリーターの出現は、不況による雇用不足によるものでもあります。金持ちや出世からの人々の解放の現れでもあります。

戦後の世界経済の発展は、多国籍企業を生み出し、経済活動の国際化を実現しました。そして、いわゆる「ボーダレス社会」を生み出しました。「ボーダレスborderless社会」と「国際化社会」とはちょっと違います。ボーダーがなくなったということは、単に外との関係だけではありません。外に対して、内を守る秩序の崩壊も意味します。国内の秩序を維持するための価値観や意味体系の崩壊でもあります。

パーソナル・コンピューターの発展と共に、「ダウンサイジング」という言葉がしばらく流行りました。「大型計算機」の時代から、ホスト・コンピューターと端末の時代を経て、ハードディスクの改良によって、パソコンの記憶量が膨大になり、パソコン同士が直接相互に情報を蓄積・交換できるようになりました。世界的規模でのパソコン・ネットワークの形成です。ここではすべてのコンピューターが自立して相互に平等なネットワークを作っています。こうしたコンピューター・ネットワークの形成は、人と人との関係の一定の変化を前提にし、それを促進します。個人が古い紐帯、価値意識から解放されて、自らの好みで生きていく可能性がうまれています（まあ、そうは言っても食っていかないと行けませんから、単純ではないですけど）。

「ボランティア」が盛んに語られるようになったのは、こんな時代においてのことです。ボランティアをするのは、社会に奉仕しなければならないからでも、罪滅ぼしのためでもありません。それは、自分の楽しみ、生き方、生活の仕方、日々の送り方の問題です。

この点について具体的に述べる前に、学校制度についてふれておきたいと思いますが、この点については皆さんのほうが詳しいはずですので、基本線についてだけ触れます。

### III 学校と地域社会

近代的な学校は、例えば、労働者の悲惨な状態は彼らに教育がない所為だとして、職工学校などを作って、その地位の向上を目指した社会主義的試みなどいくつかの形態がありますが、基本的には機会制大工業の発展に必要とされた、知識と技能を持った労働者を育てるために創られました。それを個々の企業が担うには費用負担が大きすぎることから、共同の作業として国家が担うことになっております。共同で行うことによる費用の縮約です。

そうした来歴からして、近代的な学校は知識・教養の教授と共に差別化を重要な機能として持っていました。

学校教育の中で、しばしば「差別はいけない。なくさなければ」ということが言われます。それはまだいいのですが、「差別はあってはならないこと」というのが教師の意識の中に定着しているように思います。「あってはならないこと」だと考えるから、隠そうとします。見てみない振りをする。自分のクラスや学校であると恥じだと思ふ。恥だと思ふだけならまだいいのですが、自分や学校のあるいは校長の評価が下がると思う。

しかし、私は、差別がなくなることはない、と思っております。差別やいじめは人間以外の動物の中にさえあります。あるいは、植物や鉱物の中にさえあるといえるかもしれません。そんなものから人間だけが自由であると考えるのは、思いあがりです。昔われわれは、「人間は万物の霊長である」などと学校で習いましたが、人間なんてそんなたいそうな生き物ではありません。

われわれができるのは、せいぜい差別やいじめと上手く付き合っ、害を少なくするということができるに過ぎません。差別やいじめや誤魔化しだらけの世の中で、学校だけがそれから自由であるなどということではできません。徒競走で、「手をつないで、一緒にゴール」などは、教師の教養の低さの表現以外の何物でもありません。

学校教育制度は、人間の差別化のシステムです。それは、重要な社会的役割です。教師たちは、建前でこれを否定し、裏で実行しています。しかし、授業をすること自体、差別を作り出すものです。

同じ話を聞いても、その理解の仕方、程度はさまざまです。それまで培われてきた理解力にも差がありますが、偶然も作用します。理解の程度や仕方を生徒の個性として理解し育てるだけの教養を学校教師が持っているかどうかは問題です。教師の能力もさることながら、そもそも、集団教育でそんなことが可能かどうかは問題です。

あえて言えば、教師はできないことをできないとはっきり言う責任があります。

たかが徒競走、たかが学校の成績、そんなもので勝ったから、負けたからといって、それがナンボのものだという気持ちを育てることのほうが遥かに重要だと思います。指導の問題として言えば、生れつきや育った環境、偶然などによって創られた「向き不向き」に配慮することはできるかもしれません。それ以上のことを教師ができるような顔をしないことです。

今の社会は、金銭的基準による優劣の判断が適正な配置を阻害していますから、向き不向きによって指導すること、進路を決めさせることは難しいとは思いますが、所詮生徒の一生です。生徒自身が全責任をとる以外にないのです。教師はさまざまな可能性、生き方を提示できるだけです。「先生の言うことを聞かないと後で後悔するぞ、言うことを聞いておればきっといいことがあるぞ」などは単なるウソです。そんなもの社会は保証してくれません。教師が下手な人気取りをして、責任をとれるような顔をしないことです。

#### 学校と地域の融合 —— 今なぜ「総合学習」か？

先にも触れましたように、近代の学校教育制度、とりわけ戦後の日本の学校教育は、機械制大工業の発展にとって有用な知識と技能をもち、職場秩序におとなしく従う人材を育てることを目標にしてきました。それは学歴社会として見事な成功を収めました。その成果が、経済の高成長による「豊かな社会」の実現です。

しかし今、戦後教育の成功が桎梏になっています。受験競争の中で、差別化され、序列化された人間は、部分的な知識と技能しか持っていません。それは経済が成長しつづけているかぎりでも意味を持った存在であったに過ぎません。現代を「不確実性の時代」とは良く言ったものです。誰も、何も保証してはくれません。

ひたすら、子供たちの創造性を奪う教育をして  
おいて、個性だ、創造性だといってみても、それ  
は、単にそういうものがなくなっているというこ  
とを表現しているに過ぎません。環境だ、福祉だ  
とあおってみただ、財政難で、政府も自治体も  
企業も責任のとりようがない。そこで、社会奉仕  
だ、ボランティアだと叫んでみる。無責任だとい  
えば、これほど無責任なことはありません。

繰り返して言いますが、これは戦後教育の失敗  
の結果ではなく、成功の結果なのです。戦後の荒  
廢の中から経済の復興を遂げ、貧困から人々を解  
放するために必要であったとさえ言えます。

「総合的な学習」の提起は、こうした事態の中  
で行われているものです。社会の構造も学校制度  
も、今、根本的に建て直さなければならない事態  
に立ち至っています。

それは大学と同じことです。大学の危機が叫  
ばれて来ましたが、概ね、18歳人口が減少してき  
たことにその原因が求められています。そんな簡  
単なことなら、いくつかの弱小大学がつぶれば、  
ことは済みます。それは単なるきっかけです。問  
題はそんなところにはありません。近代の大学を  
支えてきた、「近代知」そのものが問われている  
のです。

主体と客体を明確に分離し、実験と観察、法則  
の発見、その技術化と産業化こそが、近代知のあ  
り方でしたし、大学はそれを担い、合わせて産業  
の現場で働く労働者を育ててきました。

戦後の日本における大学は、自らを序列化し、  
学歴社会の形成の一翼を担い、政治的には戦後民  
主主義のひとつの担い手として、戦後の復興と経  
済の成長に貢献してきました。それは、産学協同  
として実現してきました。戦後日本の学校制度は、  
こうした大学を頂点にした研究と教育のシステム  
であったわけです。

こうした大学を頂点とした学校制度が支えてき  
た戦後の日本社会は、物質的豊かさを作り出すの  
に極めて有効でした。しかし、その社会が、物質  
的豊かささえも保証できないようになっているわ  
けです。

今、一人一人の幸せと豊かな社会とは何なのか、  
それを実現する方途はいかなるものかが問われて  
いるのです。「地域に開かれた大学」、「学校の地  
域への開放」を、公開講座や校庭開放などに矮小

化してはいけません。地域生活の中から、知の再  
建、教育の再建を図らなければならないのです。

教師も児童・生徒も学生も地域社会の一員とし  
て、地域の生活の中から問題をつかみ、解決の一  
翼を担うべきです。学校を訓練の場として地域社  
会から切り離すべきではありません。

たとえば、

「ここ（学校での授業の場）での課題は、解  
決することそのものに主たる目的があるので  
はなく、こうした学習を通して、問題発見力  
や解決力などを育てることや、調べ方やまと  
め方、報告・討論の仕方などの学び方を身に  
つけ主体的、創造的な学習態度を養うことに  
ねらいがある」（大分県教育委員会「総合的  
な学習の時間における課題づくりと展開」）。

というように、「学習態度を養う」ことに主眼を  
置くのではなく、実際に問題の解決の一翼を担い、  
責任を果たして行くことが必要なのです。「学習  
態度」はその過程で、結果として育ちます。「解  
決することそのものに主たる目的があるのでなく  
」と言った途端に、教育を地域社会から切り離  
し、砂上の楼閣にしてしまいます。それは、偏差  
値教育と学歴社会の維持に直ちに繋がります。

では、地域社会が抱えている問題とは何か。つ  
ぎに、環境と福祉についてふれることにします。

## IV 「環境」「福祉」概念の変化と「生涯学習社会」

### 「環境」概念の変化

環境問題は、日本においては、明治時代の産業  
の近代化と共に始まります。足尾銅山の銻毒（ヒ  
素、鉛、カドミウム）事件、別子銅山の亜硫酸ガ  
スによる煙害などです。この時期から戦後の高度  
経済成長期までの環境問題は「公害(public  
nuisance)」として捉えられます。足尾銅山の事件  
では、国会議員の田中正造が国会で告発し、明治  
政府と正面から対立する住民運動も起こっており  
ます。

戦後の高成長の過程においても、水俣の水銀た  
れながし、四日市市の煙害をはじめさまざまな住  
民運動がありました。この時期には、これは公害  
ではなく、企業の犯罪だとして、激しい企業の責  
任追求の運動が起こりました。

1973年の石油ショックと共に、環境問題は経済

成長が生み出したひずみが、資源問題にまで拡大して意識されて行きます。また、洗剤による河川や海の汚染の拡大と共に、われわれの経済生活の総体が問われるようになってきます。公害は、企業の犯罪によってばかりではなく、われわれの生活のあり様を作り出していることが意識されてきます。「割り箸の使用を止める運動」は、そのカリキュアです。

こうした中で、反公害運動は、自然環境の保持運動に転換して行きます。「豊かな自然」を取り戻す運動は、人間にとって環境とは何かという問題を提起します。都市への人口の集中がもたらしたさまざまな弊害が意識され、田舎の良さが意識されてきます。

美しい風景が人に安らぎをもたらすこと、鯨やイルカが人々のストレスを癒してくれることが自覚され、人と自然が歴史的に作り出して来た、自分を取り巻くすべてが環境として意識されてきます。環境は、自然環境にとどまらず、社会的な諸制度（福祉や教育制度など）がすべて、一人の人間が生きていく環境として捉えられるようになります。自分にとってそれがどんな意味を持つかを軸に世界が捉えられるようになります（「世界」は自分の頭の中にだけある）。こうした中で、「地域社会」という概念は意味を持つようになります。

### 「福祉」概念の変化 —— 障碍（害）者福祉から地域（住民）福祉へ

環境概念の変化と共に、「福祉」概念も変化してきました。日本においては、福祉といえば、「障碍者福祉」を意味しました。

ところが、高齢社会を迎えるにいたって、障碍は「明日はわが身」であることが自覚されるようになりました。また、「ノーマライゼーション」思想の導入やボランティア活動の進展の中から、先に述べたように、障碍者や老人に対する援助活動が、援助をする側の生き方の問題として自覚されるようになってまいりました。

障碍者に対する援助活動は障碍者のためだけではなく、それよりむしろ自分のためにある、という意識が定着してまいります。援助活動は自分の生活を豊かにするためにある、ということです。

例えば、正村公宏さんはダウン症の息子さんについて次のように述べています。「彼のおかげで、

人間について、そして社会についてこんなにもたくさんのことを考えさせられた、という気持ち、それが、私と彼とを結びつけ、母親と彼とを結びつけ、そして私と、家内すなわち彼の母親とを結びつけている」。

また、ボランティア活動をしている人が次のような発言をしたことがあります。「たしかに手助けしているのは自分だけけど、自分が生きがいを見出しているという意味では、自分のほうが助けられている。ボランティアによって救われているのは自分のほうだ」。

このように、障碍者を手助けすることが自分の生き方の問題として、しかも自分を同時に救うものとして意識される時、「福祉」は一方が他方を助けるものとしてではなく、ともに快適な生活を作り出すものとして捉えられるようになります。「福祉」は障碍者を救うものではなく、すべての人に豊かな生活をもたらすもの、考えてみれば、福祉とは障碍者、健常者を問わずすべての人の生活を豊かにするということであったことが確認されるようになりました。

こうして環境問題も福祉も、人間生活の総体のあり方として捉えられるようになります。

### ・ 地域 —— 人と自然、人と人との共振

ところで、「自分が助けられている」という実感を持った発言はほんとうに貴重だと思います。ところが、こうした発言を聞いた施設の職員や学校の教師がボランティアに来た人や生徒に対して「手助けをしてやってると思ってはいけません、手助けをさせていただいてると思いなさい」などと馬鹿なことを言って、新たな関係を台無しにします。困ったことです。

ことはそれほど簡単ではありません。金勘定の世界では、「良いこと」はしばしば無駄なこともあります。人に情けをかけることは、「一文にもならない」ことでもあります。昔の人は「情けは人のためならず」といいましたが、これは、めぐり巡って自分のためになるという利害関係剥き出しのことだったのでしょくか。それとも、先ほど述べたような、人のために尽くすこと自体が、自分のためだということだったのでしょくか。

ノーマライゼーションというのは言うほどに簡単なことではありません。というのは、われわれ

は障害者に対する長い差別の歴史を持っているからです。これまで長い間、障害者は「生産と戦闘に障害のある人」のことでした。また、「汚い」「気持ち悪い」存在でした。そして、こうした差別意識は、自然的で社会的な存在である人間にとって必然的でもあることに、克服の困難さがあります。

人間は、その進化のそれぞれの段階で、その段階における正常な姿という感覚を持っています。それは生物としての人間が存続しつづけることにとって必要でさえあります。足は2本で頭はひとつ、口はひとつで目は2つ、目が後ろにもあったら便利だと思うことがないわけではありませんが、あったらやはり化物物です。指が6本あっても手が4本あってもいいようなものですが、機能的には現在の方が良かったのでしょうか。その姿をわれわれは美しいと感じ、そうでないものを気持ち悪いと感じます。

それぞれの社会の発展段階に有用な人間をわれわれは正常と見なします。多重人格者や統合性失調症の人を変だと思えます。身体的なことであれ、精神的なことであれ、正常か異常かは、基準をどこに置くかということだけのようにも思いますが、一定の社会には一定の判断の基準が存在します。それは所詮相対的なもの、変化するものなのですが、それぞれの社会、それぞれの発展段階においては、不動のもののように感じられております。身体的な障害者が、精神的病に陥った人と障害者という点で同一視された時、「俺たちをキチガイと同じにするのか」と公然と発言したのはつい最近のことです。

われわれの日常生活を支えている生活のリズム(人間と自然との関係、人間と人間との関係)は、変化をうみだす異質なものに対する恐怖心に基礎付けられているので強いとも言えますが、異質なものを排除することによって成り立っている、きわめて危ういものと言うこともできます。

われわれが「障害者」をみるとき、「異質なものの排除」という感覚をもっており、そのことが障害者を差別することにつながるだけではなく、自らをも不自由にしているように思います。

例えば、坂巻 熙(ひろむ)さんは次のように述べておられます。

アメリカに一緒に行きました車椅子の青年

に、日本に帰ってきて、アメリカといついどこが違っているかと聞きました。そうしましたら、「人々のおれを見る視線が違う」と答えたのです。どう違うか。「アメリカに行っている時は、顔に視線を感じた。日本に帰ってきたら背中に感じた」というんですね。

道であった人に、旅行の趣旨を説明すると、「わかった。頑張れよ。これから大変だからな」と、握手して励ましてくれる。たいへん歓迎されるわけですね。当たり前仲間として、顔と顔と見合せて会話ができる。

ところが日本に帰ってきてみると、すれちがう人はみんな目をそらす、そう彼は言うのです。まともに見てくれない。声もかけてくれない。そして、すれちがったあと振り返ってオレを見る。その視線を背中に感じる、と言うのです(③ 84頁)。

「振り返ってみる」といわれると何か言い訳をしたくなったりもしますし、「視線を背中に感じる」と言われると、それはハンディキャップをもった人にかぎらず、われわれも、しばしば感じることだと言わざるを得ません。そのかぎりハンディキャップをもっている人々を捉らえている問題、あるいはハンディキャップをもっている人々を、「ハンディキャップ者」や「障害者」にしている問題は、同時に「健常者」を捉らえている問題であるとも言えます。それは「世間」というものなのかも知れません。

テレビの番組でのことでしたので発言者の名前は忘れましたが、「背中に視線を感じる」だけではなく、子供をつれた母親の「良い子にしてないと、あんなになりますよ」という声が聞こえてくるのだそうです。その母親はその母親で一つの世界をもっており、豊かな生活、良い人生、正しい生き方があり、そこから外れたらいけないと教えるわけです。

そこから外れたもの、違ったものを排除し、卑しめ、自分とは関係のないものと言い張ることによって、自分の生活や集団を維持しようとする。そのかぎり、精神的には皆障害者なのです。

「違いを認め合ってともに生きる」、「本人が望まない限り排除しない」人間関係や集団の在り方というのは、そう簡単ではありません。しかし、今、そういう思考が芽生えつつあるのです。

片手のない人、足が自由にならない人、目の見えない人、こうした人たちを、「障害者」、「ハンディキャップ者」とレッテルを張って区別し（差別し）、何か特別の人として扱うのではなく、背の低い人が高いところのものを取る時に、脚立をつかうように、ハンディキャップをもっている人にたいして、そばにいる人、あるいは社会がそのハンディキャップを補っていくという思考が今育ちつつあります。

松兼功さんは、ご自分のことについて「障害者の松兼功さん」とか「障害者のフリー・ライター」と紹介されることにたいして、「障害者」は「私のすべてではない」、「ただの人間としてふるまえる空間や時間が不可欠」と言われ、ある人がスウェーデンで、「「障害者の画家」に会いたい」と依頼した時の話を紹介しておられます。現地の福祉関係者は「障害者の画家」の意味がなかなか理解できずやっと意味が理解できたその関係者は「スウェーデンには、画家のなかに障害をもった人はいますが、「障害者の画家」はいません」と答えたそうです。

松葉杖の男性は、酒好きのおっさんだったり、車椅子の女性は刺しゅうの上手なおばさんだったりするわけで、かれらを、まず「障害者」としてみるのではなく、酒好きのおっさんや刺しゅうの上手なおばさんが、たまたま背が低かったり、足が悪かったりもする、と見るができるようになるのには、たぶん何かが必要なのだと思うのです。それが何かがよくわからないのですが、人を見る目をちょっと変えること、世の中をちょっと違った角度から見る、それだけでまったく違った世界が開かれるようにも思います。

かつて、花崎皋平さんは「無に等しいものでありながら、自分と同じ運命のもとに他人もまたおかれていることを、身につまされて感ずることができたら、そこに生まれる感情は、〈やさしさ〉と名づけられるだろう」。このような感情を触媒にしてはじめて、人々の連帯が可能になるのではないか、と述べておられました。

鉄粉を鉄板の上ののせて、バイオリンの弓で鉄板を振動させると、鉄粉は板の上で様々の幾何学模様を描きます。弓と鉄板と鉄粉とは共に振るえてはいるが、それはそれぞれ固有の振るえ方を

っています。それは正に響きあいです。鉄板が平たいからといって、鉄粉も一様に平たくなるわけではありません。それは固有の形、固有の響きをもっています。

われわれは個人を個人として容認すること、考え方の相違や利害の対立を前提として折り合いを付ける道を学ばなければならないような気がします。それは、「本人が望まないかぎり排除しない」関係であると同時に、本人が望まない限り仲間に入れない関係でもなければならないような気もします。仲間に入ることで自体のなかに一定の条件が在ることは、諸個人間の利害の相違や対立が存在するかぎり、あるいは有機体としては別組織であるかぎり、不可避的なことであって、これを排除することは、万人が神であることを求めることとなるような気がします。それは本来不可能なことです。理想として掲げる理念を人間が描けるといふことと、それをただちに実現できるかどうかとは自ずと別の問題なのだろうと思います。

個別性の重視と、同じことですが、多様化したものを「価値」や「規範」と言い張ることをやめ、それを「好み」だと考えれば、内部にたいする画一的規範の強制と異質なものの排除から、われわれは自由になれるような気がします。集団をなして生活をする時、「好み」の絶対性など主張するわけにはいかず、われわれは「分をわきまえ」て生活せざるをえないわけですが、その「分」というのは封建社会における「身分」ではないわけですから、われわれは所詮自分を中心に、自分の好みで生きているのだから、そのかぎり己れの生活の個別性、部分性、相対性をわきまえていなければならない、ということのように思えます。そのような意味で分をわきまえることが、他人や自然に対して優しくなれることにつながるような気がします。そうして、その時その時、必要なかぎり社会を組織する道をわれわれは学ばなければならないのではないのでしょうか。そうした人と人との結びつきを私は「地域」と呼びたいと思います。

#### ・「学校教育社会」から「生涯学習社会」へ

こうした中で、教育に携わっておられる先生方に考えていただきたいことがあります。

「生涯学習社会」というのは、提起者自身もその歴史的意味についてはあまり考えていないよう



な気がします。政府や企業は、産業構造の変化による失業者を救済し、技術発展に必要な労働力を確保するリカレント教育を中心にその意義を見出そうとしています。文部省や大学は、18歳人口の減少を補う新たな儲け口としてその意義を見出そうとしています。しかし、いったん提起されたものは一人歩きします。

人は生涯に亘って、学校の内と外とを問わず、年齢を問わず学ぶわけです。その時、学習や教育の意味が変わってきます。学校は単なる訓練の場ではありません。学校と社会との区別はなくなります。教えるものと学ぶものとの区別もなくなります。純粹に論理的に考えれば、教師という職業さえなくなります。すべての人が教え、学びあうものとなります。

実際には存続しつづけるであろう学校は、地域社会の中での一集団として、地域の中で一定の役割を果たさなければなりません。さしあたり、児童、生徒、学生として学ぶものたちも訓練期間にあるものとして、隔離されるわけではありません。地域社会の一員として一定の役割を果たすべきです。

児童、生徒、学生は地域社会の運営に直接参加し、単に学ぶだけではなく、地域社会に対しての「教育」をすることが可能です。しかし、それは時折流行する「子供に学ぶ」というようなものではありません。

例えば、アフリカやインドの飢餓状態を知った児童が、「自分はこれまで食べ物を粗末にしましたが、これからは好き嫌いや食べ残しをしないで、食べ物を大事にしなければいけないと思いました」などといいます。それを聞いた教師が、子供は大切なことを言った、自分は子供に学んだ、などとトンチンカンなことを言います。

インタビューをしたレポーターも良いことに気付きましたね、と感心している。日本の子供が食べ残しをしなかったからといって、アフリカの子供の口に何かが入るわけではありません。子供が小遣いを無駄に使わないで、飢餓状態の人々に募金をします、というのなら話は別です。でも、彼らは言います。子供は成長の過程にあるのだから、そうやって、アフリカの飢餓状態を知って、自分の生活を反省することは大切なことだ。

こういったことは普段にあります。すべてのこ

とについて、成長それ自身が抽象的に自己目的化されて行われます。そうしたことで、子供はけっして成長はしません。ぶりっ子になるだけです。「子供から学ぶ」というのは、そんなことはありません。子供がもっている社会に対する批判力を生かすことです。

子供は大人の「誤魔化し」を見破ることが得意です。それは子供の純粹さによるといっても良いし、無知によるといっても良いのですが、何らかの判断をするのに考慮することが少ないがゆえに、しがらみの多い大人に比べれば、単純な考え方や結論を出します。大人はこれを、あんたの言うのは理屈だ、そんな簡単には行かないのといって無視します。そして、複雑な世間のしがらみの中に大人は埋没して行きます。古い秩序はそのまま維持されます。

子供の批判力を生かすためには、地域での具体的な問題の解決に参加させるべきです。例えば、地域の環境調査などを、理科や総合学習の時間に取り上げるならば、環境の改善の運動を実際に地域の住民と共に進めるべきです。その際、環境の改善が第一義的なことです。子供はその過程で、勝手に成長します。子供の成長を自己目的化することによって、実際の問題の解決から逃げたのでは、子供はけっして成長しません。そう言う意味で、学校と地域の垣根を取り払うべきです。

最後に、今後の地域社会の生活で何が問題なのかについてすこしだけ話をいたします。

## ネットワーク社会

バーバラ・フォードらによって、‘Think Globally, Act Locally’（グローバルに考え、ローカルに行動せよ）と語られたことがありました。大分県の「一村一品」運動などでも盛んに使われた言葉です。「地域」というものに、地方とは異なった意味を持たせようとする試みとして意味があります。

現在はむしろ、‘Think Locally, Act Globally’（ローカルに考え、グローバルに行動せよ）の方に意味があります。普遍性や完全性などは近代の貨幣の普遍性が生み出した幻想に過ぎません。問題もその解決も地域的・個別的、相対的です。共通性や一般性に基づく連帯ではなく、地域性・個

別性をお互いに認め合い、解決の相対性を容認したままでの連帯が問題です。解決はあくまで地域的・特殊的です。そのかぎりローカルに考えることが必要です。そうした特殊なものネットワークとして世界はあります。

同じ障害者といっても、一人ひとりの障害はみな特殊です。普遍的な解決、最善の方策などを待っていれば何とかなるわけではありません。解決は常に相対的なものに過ぎません。

地域通貨やエコマネー導入の試みは、こうした時代のひとつの象徴です。部分的には追加的な需要と生産を生み出すかもしれません。しかし法定通貨とリンクさせた地域通貨は所詮うまくいっても補助的なものにとどまる以外にないし、一時的にはともかく、法定通貨に吸収されて行く以外にありません。法定通貨と完全に切り離されたエコマネーはボランティア・ネットワーク自体に意味があるのであって、エコマネーは単なる遊びです。

にもかかわらず、日本だけでも100を超える地域での試みが在るのは、貨幣にとりつかれた人々が、それから自由になるのがどんなに困難であるかの象徴とも言えます。コンピュータ・ネットワークを手段とした「自立した個人の自由な連合」は、30年（1世代）単位の時間を必要とするでしょう。

それにもかかわらず、一人ひとりの人間が、自分の好みと利害を出発点にしながら、お互いに貨幣を媒介にしないで直接に折り合いをつけて行うとする試みは、さまざまな形で今後も試みられることだと思います。

貨幣を媒介にしないで、折り合いをつけて行ける道を支えるのは、おそらく一人ひとりの「人としての誇り」であるように思います。アメリカ原住民の一種族であるプエブロ族は、「自分たちの祈りが太陽の運行を支えている」という信仰を持っていますが、それは彼らの誇りであり、自分たちを律するものでもあります。人の誇りは、物語という形をとって、言語化されます。日本においてもさまざまな神話や民話として残っているものがそうです。

物語は自己を中心に、自己と世界の関わりを表したものです。人は物語を紡ぎながら生きていく存在です。新しい地域の物語を紡ぐことができるかどうか、現代の問題であるように思います。

## 【参考文献】

- ①糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス、1968年。
- ②松兼功『障害者に迷惑な社会』晶文社 1994年。
- ③坂巻熙『生きること生かされること…共につくる福祉社会へ…』ぶどう社 1990年。
- ④正村公宏「ダウン症の子をもって」（『世界』1981年9月）。
- ⑤大熊由紀子『寝たきり老人のいる国いない国』ぶどう社 1990年。
- ⑥山口昌男他5名著『ひとはなぜ自然を求めたのか』三田出版会 1995年。
- ⑦金子郁容『ボランティア…もうひとつの情報社会』岩波新書 1992年。
- ⑧辺見庸『もの食う人びと』共同通信社 1994年。
- ⑨宮本憲一『環境と開発』岩波書店 1992年。
- ⑩中川志郎『動物考』未来社 1987年。